PREX NOW

No.166

July / August 2007

財団法人　太平洋人材交流センター
Pacific Resource Exchange Center

contents

page 1　●ニュース&レポート 1
海外関係機関との連携促進と
人的ネットワークの維持、強化の取組み

page 2　●講師の声
文化を超えてお互いに理解しあう
国際協力の意義

page 3　●ニュース&レポート 2
ブラジルの「出産のヒューマニゼーション」を目指して

page 4　●ニュース&レポート 3
アフリカの燃える大地、
ケニアからの研修参加者を迎えて!!

page 5　●ひとこと
中東が身近になれば世界が広がる
独立行政法人 国際協力機構　兵庫国際センター
所長　森川秀夫氏

page 6　●PREXだより
事務局ニュース、コラム

われわれの使命は、
常に開発途上国にとって
有益な存在であり続けることです。

ニュース&レポート 1　News & Report

海外関係機関との連携促進と人的ネットワークの維持、強化の取組み

PREXは、開発途上国人材育成機関、国際交流機関としての基盤強化のために、海外の関係機関との連携を促進し、人的ネットワークの維持、強化に努めている。海外関係機関との連携研修、同窓会フォローアップ研修は、2005年度が11件/35件中、2006年度が14件/43件中となり、研修全体の3割を占めるまでとなっている。

近年、現地関係機関へのニーズ調査、研修参加者を対象としたフォローアップ活動にも積極的に取組み、海外関係機関から開発途上国の人材育成機関として評価されるようになってきている。

2007年度は、ベトナム、マレーシア、中国広東省、メキシコ、中国ラサ・西寧、フィリピンにて現地関係機関との連携研修を実施する。受入研修としては、マレーシア人的資源省職員受入研修、西安市水環境整備事業などを引き続き実施する。また9月には新規で新疆ウイグル自治区からの要請を受け、中小企業振興研修を実施する予定。同窓会フォローアップ研修、ニーズ調査は、モンゴル、ラオス、カンボジアで実施する。

2006年度は海外関係機関との連携研修、同窓会フォローアップセミナーを年間14件実施

	▼テーマ	▼関係機関
● AOTSの補助金を活用した連携研修 … 4件		
• メキシコ海外研修	輸出促進	メキシコ・レオン市
• ベトナム海外研修	販売促進	ベトナム商工会議所
• 中国菏澤市海外研修	中小企業経営革新	中国・菏澤市
• 中国海外研修	知的財産	広西生産力促進センター 中国科学技術法学会
● AOTSの補助金、関経連の支援により実施した連携研修 … 1件		
アセアン（タイ）遠隔研修	輸出促進・マーケティング	タイ工業省
● 国際協力銀行の円借款を活用した西安市・京都市との連携研修 … 2件		
西安市水環境整備事業 （西安市の上下水道環境改善技術協力プロジェクトの一環）	上下水道 環境改善	西安市 （2回に分けて実施）
● 経費全額先方負担で実施した連携研修 … 3件		
• 中国・山東省一村一品研修	地域振興	中国・山東省
• 山東省人材開発マネジメントセミナー	人材育成	山東省人事庁
• マレーシア人的資源省職員受入研修	人材育成	マレーシア人的資源省
● PREX国際交流積立資産などを活用した同窓会フォローアップセミナー … 4件		
• シンガポール同窓会フォローアップセミナー	経営管理	PREX同窓会
• インドネシア同窓会フォローアップセミナー	経営管理	PREX同窓会
• 中国（北京、新疆）重慶、同窓会フォローアップ遠隔半日セミナー	中小企業振興	PREX同窓会
• ミャンマー同窓会フォローアップセミナー	経営管理	PREX同窓会

文化を超えてお互いに理解しあう　国際協力の意義

[ブラジル国別研修「助産施設における人間的出産・出生ケア」コース]

2002年度にスタートした本研修は、2006年度で5回目を迎えた。これまでの研修参加者は、52名となり、帰国研修参加者が現地で活躍する様子を度々伝え聞いている。本研修はPREXにとっては、初めての医療・保健分野の研修であったが、専門家の方々で組織された運営委員会と、助産所の皆様の全面的なご協力で、5年間の実施を無事終了した。本研修に深く関わっていただいた毛利助産所の毛利多恵子氏の寄稿文を紹介する。

毛利 多恵子 氏
国内委員会、
毛利助産所助産師

今春、2002年度からはじまった5年間のブラジル国別研修が終了した。この研修は、1996年から5年間ブラジル東北部で展開された母子保健プロジェクトの継続研修でもあった。ブラジルは、世界一帝王切開の多い国であり、女性も医療者も帝王切開が一番安全で痛みから解放される方法として選択する傾向があった。現地で展開されたプロジェクトは、「人間的な出産と出生」がコンセプトであり、いき過ぎた医療介入の多い産み方、生まれ方を日本の開業助産師たちの協力をえて、見つめなおす内容であった。ブラジルおよび南米に「PARTO HUMANIZADO 人間的な出産」という言葉やムーブメントが広まったほどである。

このコースは、約2ヶ月半の期間で、「助産ケア」について学ぶ。日本の母子保健、世界の母子保健、助産学講座という科目において、最新の助産ケア論を学ぶとともに、助産所というプライマリーヘルスケアを担う医師のいない場での出産ケア、また病院内バースセンターでの助産ケア、そして異常時の医療との連携として大きな病院見学をいれるなど、日本のよきモデルを経験していただく内容であった。実習が4週間あり、演習など実技が半分を占めるプログラムとした。

見学や実習は、母子に優しい良いケアを目指している施設を選択した。母子に優しい施設は、海外の研修生に対しても優しい対応であった。特に助産所では、家庭的な施設であるため、畳があり、家族的な関係があり、日本人の生活習慣や文化を十二分に味わうことができたのではないかと思われる。

■先進国も開発途上国もともに認識しあう機会

1996年からはじまった日本とブラジルの国際協力は、この研修を終えて、約10年間のプロジェクトになるが、ブラジルでは母子保健政策に『人間的ケア』が組み入れられ、確実に帝王切開率が減少し、助産職教育が強化され、社会の中で、産み方、生まれ方が討議されるようになってきている。かつて、ブラジルにおいても60年前は、自宅で自然なお産をしていた。しかし大病院での出産の集約化、出産を手術のように考える医学のあり方、助産という「自然なプロセスを促進する」専門職を活用せず、助産師の教育もしてこなかったため、女性は出産を怖くて悲惨な経験として受けとめ、ケアのない痛みの経験が、帝王切開という痛みから早く解放される方法を選択のオプションがなく、安易に選んだのかもしれない。ブラジルでプロジェクトを実施していたとき、お産は痛いけれども家族や医療者からの助産ケアを受けることによって、痛い以上の経験をすることができたと女性たちがいいはじめた。女性たちは口コミで出産ケアの必要性を伝え始めたのである。

最近では陣痛を起こすオキシトシンというホルモンが非常に重要な役割をしていることが明らかとなっている。薬ではなく人の脳から分泌されるホルモンの意義や痛みをつくるオキシトシンが愛情形成に重要な役割について注目されてきた。陣痛という痛みは辛いものであるが、人を産むときに必要な痛みとして認識され、その痛みをこえることが、女性の強さをつくり、またこどもとの愛着形成やこどもが子宮内から子宮外に適応するための必要なプロセスとして準備されていることが再認識されてきている。自然な生理的なしくみを先進国も開発途上国もともに認識しあい、医療が進歩しても忘れてはいけないこととして、文化を超えてお互いに出産ケアの本質について理解しあう機会となった、この国際協力の意義をひしひしと感じている。

■今こそ日本に国際保健医療協力の知恵を還元

日本でも産科難民という言葉があるように、出産施設の閉鎖、産科医不足を理由に、お産の集約化が行われようとしている。先進国は、集約化の失敗から分散化モデル、エビデンスに基づき生理的なプロセスを尊重するなど母子中心のケアにシフトしているのに、日本の母子保健政策はどこにいくのか、出産ケアを日々している私は不安を感じている。ブラジルの研修を終えて、今こそ、日本に、国際保健協力の智恵を還元しなければと思う。

聖路加看護大学で、
実習に使う模型を見学

日本赤十字社
医療センターでの
視察風景

力の具合はこんな感じで。。。
（鍼灸実習）

ブラジルの「出産のヒューマニゼーション」を目指して

[ブラジル国別研修「助産施設における人間的出産・出生ケア」コース&「日系研修員受入」]

■研修を担当して

国際交流部　主任　関野 史湖

研修実施に携わられた運営委員の先生、研修監理員、視察・講義を受けてくださった先生方の努力は並大抵のものではなかったと思う。そもそも出産という女性にとってデリケートな瞬間のケアを、現場に立ち会って見せていただこう、というのだから、その難しさは想像していただけると思う。

が、お母さんは強かった！「全然平気ですよ～」とあっさり出産への立会いを了承くださったお母さん、乳房マッサージを見せてくださったお母さん、お母さん達は、「ここまで見せてくださって大丈夫なんですか?」とこちらが心配になるくらい本当にオープンで、率直で「母の強さ」を感じさせてくれた。もちろんこれはお母さん方だけが強者だったのではない。各助産所、病院、クリニックの先生方との信頼関係の上で成り立つことだと思う。「この先生、助産師さんがいれば大丈夫」という先生との強い信頼関係があって、初めて、かなった瞬間だった。

■現地で人間的出産の概念の普及に努める研修参加者の活躍

ブラジルでも自然分娩、人間的出産は特に南部を中心に広まりがでているようである。また昨年の研修員は人間的出産をテーマに、ブラジルの他の場所へ講演をしにいったりもしているとのことだ。一つのことを急に変えるなんて無理だ。でも少しずつ、少しずつ。いつかお産にかかわる家族みんながハッピーなお産が、ブラジルの沢山の場所で実現できますように。

病院の中に入るときは、きちんと準備を!

実際にヨガをしてみて、心地よさを感じる

「助産施設における人間的出産・出生ケア」コースのテーマと同じく、ブラジルの「出産のヒューマニゼーション」を目指して日本で学んだ「日系研修員受入研修」の参加者 市里スエリさんのコラムを紹介する。スエリさんは、母子保健の専門家で、ブラジル国別研修にも参加した。

日本では、「人間的な出産」に関する理論、ケアを学び、クリニック、病院、助産院の見学、病院での実習を行った。また帰国後のアクションプランを作成した。現在、ブラジルで日本での経験を活かしている。

スエリ 睦美 佃 市里さん
(Ms. Sueli Mutsumi Tsukuda ICHISATO)
マリンガ州立大学看護学部 教授

看護士を経て看護学部教授を務めています。専門は小児看護です。母乳支援やNICU(未熟児室)入院児のための母乳バンク、そしてカンガルーケア等についても講義しています。

日本での滞在は、2007年2月5日から5月12日までの97日間と長期間で、大阪(茨木市と大阪市)、神戸市、敦賀市、東京(東京都)、他の地方にも行きました。研修プログラムは、講義、ワークショップ、助産所・病院・看護婦養成所の見学、さらに 赤十字病院と聖路加看護大学での見習いと多岐にわたりました。

研修中の疑問点の解決方法や研修の進め方などは常に日本助産学会国際援助システム委員会の藤原さんにサポートしてもらいましたし、生活面など多くの点でPREXに支えてもらいました。

またこうしたJICAのスキームが無ければ、日本で学ぶことは出来ませんでした。

日系人でありますが、日本とブラジルの社会・文化の相違、言語の相違には苦労しました。ブラジルでは、日本で学んだ知識を活かしていきたいと考えています。

バングラデシュ、フィリピンの母子保健コース参加者とも交流するスエリさん。

助産施設における人間的出産・出生ケア(ブラジル)

◎実施期間　2007.2/17～4/27
◎研修参加者　ブラジルで産科を専門としている看護師6名、出産に関する業務に携わるアドミニストレーター(行政官、大学関係者等)4名
◎委託元機関　独立行政法人 国際協力機構(JICA) 大阪国際センター
◎内　容　助産に関わる講座、関西の助産所、病院での各種ケアの現場実習

日系研修員受入研修

◎実施期間　2007.2/13～5/10
◎研修参加者　日系ブラジル人　市里スエリさん
◎委託元機関　独立行政法人 国際協力機構(JICA) 大阪国際センター
◎内　容　助産に関わる講座、病院実習、大学での助産学教育について、アクションプラン作成

お世話になった方々、企業・団体他

(講義・訪問順・敬称略)

大阪大学大学院 人間科学研究科 中村教授、医療法人医徳会 真壁病院 羽根田院長、津田塾大学 学芸学部 国際関係学科 三砂教授、日本助産学会国際援助システム委員会 藤原氏、毛利助産所 助産婦 毛利(多恵子)氏、大谷助産院 大谷院長、医療法人 薫風会佐野病院 助産師分娩科 有岡氏、中野氏、茂岡氏、女性ライフサイクル研究所 村本所長、毛利助産所 助産婦 毛利(種子)氏、JICA留学生Ms.Issa Jazmin Morillo、亀田マタニティー・レディースクリニック、進 純郎氏、上田市産院 廣瀬副院長、あゆみ助産院 助産婦 藤井氏、大阪府立母子保健総合医療センター、日本マタニティー・ヨーガ協会 認定インストラクター 恵納氏、鍼灸院松下 松下院長、関西ブラジル人コミュニティ、アクエリエル鞍馬 菅田代表、神戸市保健福祉局健康部地域保健課 藤山主幹(保健事業担当)、マナ助産院 永原院長、瀧澤助産院 瀧澤院長、川野氏、日本助産師会 江角事務局長、HANDS、聖路加看護大学、日本赤十字社医療センター、大阪大学 大学院 人間科学研究科 エレーラ・ルルデス氏

アフリカの燃える大地、ケニアからの研修参加者を迎えて!!

[ケニア貿易振興]

PREXは3月後半に久々のアフリカ案件の研修を甲村PREXシニアコースリーダーの協力を得て実施した。本セミナーはケニア貿易振興機構に所属する職員の貿易研修事業の企画、立案能力強化を通じて、ケニアからの輸出促進に寄与することを目的に行ったものである。今回、来日したのは貿易研修を担当する部門長と課長の2名で、日本で行われている貿易振興に必要な知識を広く学び、大いに啓蒙を受けて帰国の途についた。

■ケニアのイメージは?

日本人のケニアに対するイメージはアフリカの燃える大地、雄大なサファリ、マラソンであり、あまりケニア産品は思い浮かばないのが一般的であろう。サファリの動物より人間のほうが危険との冗談もあるほどにひったくりの多いナイロビだが、ケニアを訪問する日本人のお目当てはなんといってもサファリに代表される観光であろう。

■ケニアの切り花!

そんなケニアの主要輸出品目に切り花がある。高地の地理的条件を生かして、切り花はケニアからの貴重な外貨獲得の輸出商品になっている。薔薇は代表的な切り花であり、ケニア産は高地で栽培される関係で小さいサイズが主体、国際的な競合では韓国産、インド産となるものの、日本市場では好まれるサイズとのこと。

松下電器の人材育成の考え方には大いに啓蒙を受ける。

■フェアトレード(公平貿易)とは?

スーパーのフラワーショップで見かけるケニア産の薔薇にはフェアトレード(公平貿易)と書かれているものがある。これは発展途上国の生産者と適正な価格で商品取引を継続的に行う貿易のことで、途上国の生産者の自立生活を支援しようとする活動のことである。ケニア産薔薇の多くはバルクで世界の主要切り花市場である、アムステルダムに集荷され、世界各国に再輸出される商流をとっているが、日本市場の消費者が、フェアトレードと書かれたケニア産薔薇は生産者国からダイレクト輸入されたもので、発展途上国支援につながっていると知っているのは残念ながら少ないのが現状である。

■ケニア貿易振興機構のお二人が日本で学んだこと!

JETROでは日本の貿易振興機関として持っているいろんな機能を知ることができたのはケニア人2名には有益であった。貿易振興として調査機能、統計データ機能、さらにライブラリー機能では実際の図書室を見学し、機能的な書棚まで写真にとっておく熱心ぶり。ビジネスマッチングでは日本の企業向けに現地の企業情報がネットですぐ見れるにいたってはケニア企業情報を整備するので入れて欲しいと具体的な話まででてくるほどであった。

特に関心を持ったのはe-learningによる貿易実務講座であった。カリキュラム編成、運営方法、具体的な受講料とまだまだケニアではインフラ環境が整っていないにもかかわらず将来のトレンドに備えるような眼で学んでいたのが印象的であった。

今回、貿易研修を貿易振興の視点から幅広く学ぶべく、浅野先生による貿易研修講義から、日本郵船㈱コンテナーターミナルでの貿易の現場まで、フットワークを生かして多数訪問したが、普段慣れていない公共機関での移動は日本人の日常生活に触れ、興味深いものの、辛かったようだった。

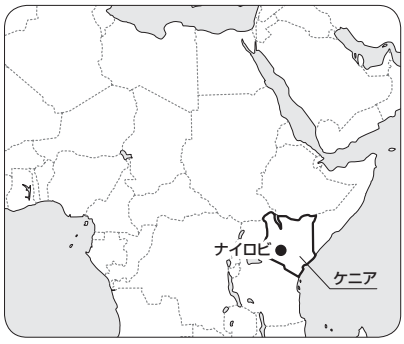
■ファイナルレポートは遠隔会議システムで!

一連の訪問、講義をこなしたあとにファイナルレポートづくりを始めた。スワヒリ語よりも英語が母国語だけにレポートづくりもお手のもの。学んだことは何か、その中で有益だったことは何か、そしてケニアに帰国後、自国の組織に応用、改善、行動することをJICAケニアオフィスと遠隔会議システムで結び、日本側と現地側で共有化ができたことは有意義であった。今後の応用に期待したい。

—国際交流部長　深田 進

もっとアフリカ理解を!

昨今貧困撲滅支援とかでアテンションのあたるアフリカではあるが、今回ケニア人に接してむしろ日本人の我々もあまりアフリカのことを知っていない現実に直面することが多かった。比較的発展しているケニアですら、部族が違うと言葉も違い、研修員同士でも部族語は通じないとか、農業主体の中で緑茶生産を輸出専門でやっているとか、ケニアンコーヒーはスターバックスも使っているとかの話題まで、今回の滞在で彼らも日本ファンになり、われわれもプチケニア通になることのできた研修アテンドでした。そしてやはりサファリには行ってみたい。。。



■ケニア(Kenya)
首都:ナイロビ(Nairobi)　面積:582,650㎢
人口:34,707,800人　言語:英語、スワヒリ語

ケニア貿易振興

◎実施期間　2007.3/20〜30
◎研修参加者　ケニア貿易振興機構　職員　計2名
◎委託元機関　独立行政法人 国際協力機構(JICA) 大阪国際センター

お世話になった方々、企業・団体他

(講義・訪問順・敬称略)

JETRO、産能大学 浅野主任研究員、㈲ゼータ 弓場専門家、大阪商工会議所、大阪国際見本市委員会、松下電器人材育成カンパニー、インドネシア貿易振興センター、NYK神戸コンテナーターミナル

ひとこと

中東が身近になれば 世界が広がる

独立行政法人 国際協力機構　兵庫国際センター
所長　森川 秀夫 氏

2003年7月から2006年1月までの2年7か月、私は中東のヨルダンに勤務していました。

中東は日本から地理的に遠いこと、日本国内にイスラムが浸透していないことなどから、日本との関係は希薄でした。私たちの意識が中東に向いたのは、1973年と1979年に起こった2度のオイルショックが契機でしょう。日本は原油輸入量の90%程度を中東産油国に依存しています。中東は貴重なエネルギーの供給元です。

日本と中東の接点

歴史をさかのぼれば、日本と中東は様々な接点がありました。奈良の正倉院に納められている宝物には、ペルシャ風のガラス製水差しなど中東文化がシルクロードを通じて伝わっています。また、幕末の遣欧使節団は、エジプトのピラミッドを訪れています。

4回の中東戦争、10年に及んだイラン・イラク戦争、ソ連のアフガニスタン侵攻、湾岸戦争、米国などによるイラクへの武力行使、イスラエル・パレスチナ戦争など、中東は紛争の絶えない地域です。紛争の背景は複雑ですが、水問題が要因の一つです。ヨルダンの1人1日の水消費量は50ℓ程度で、日本人の6分の1。深刻な水不足ですから、水源の確保は死活問題です。

イラク戦争で旧フセイン政権の崩壊後、イラクの「内戦」の状況が毎日といってよいほど報道されています。最近は石油価格が高止まりしており、否でも応でも中東の動向に無関心ではいられません。グローバル化が進む今日、中東地域での大量破壊兵器の拡散やテロの発生などは、日本の平和と安定に影響します。

中東の復興支援活動に取り組むJICA

JICAの中東への協力は、パレスチナ、アフガニスタン及びイラクを重点対象国（地域）として復興支援活動に取り組んでいます。重点分野は、パレスチナは自治政府の民主化支援や農業開発など、アフガニスタンは農村部の総合開発、公衆衛生・教育支援など、イラクは行政官の育成、医療・電力・上水道の改善などです。

ヨルダンはその経済水準から日本の無償資金協力の卒業国ですが、ヨルダンの安定は中東地域の安定に不可欠との考えから、わが国政府は同国に対して例外的に無償協力を継続しています。ヨルダンは、欧米と経済面で肩を並べている日本に一目置いています。タクシーに乗った際に運転手から、「日本は広島と長崎に原爆を投下されたが、世界第2位の経済力をどうして遂げることができたのか」といった質問をよく受けました。日本が伝統的な社会や文化を維持しながら近代化を進めたことから、日本を手本にしたいという思いがあるようです。

●

ODA予算が厳しい状況下、JICAの活動に対して一般の方々の理解と支援をさらに得るために、JICAの活動をできるだけ紹介するような開かれたJICAとなることを目指しています。

PREXの研修の約半数は、独立行政法人 国際協力機構（JICA）の委託を受けて実施するものです。2007年度にJICA兵庫国際センターの委託を受けて実施するのは、草の根地域提案型事業「資源循環社会における中国の都市環境整備システムの構築」と日系人研修（貿易マーケティング分野）です。森川所長には、「今後も一層PREXとの関係が深まることと期待しています」とメッセージをいただきました。

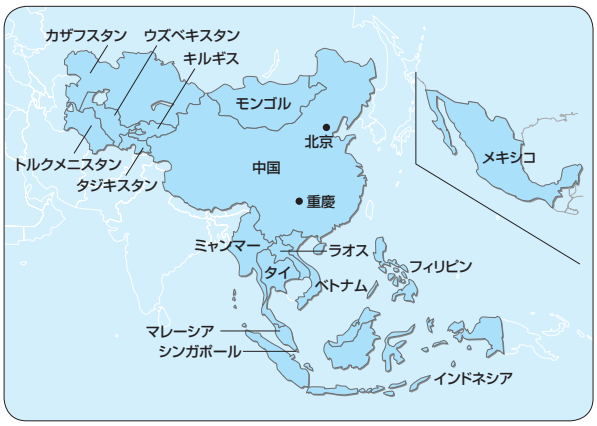
JICA兵庫国際センター　ホームページアドレス：http://www.jica.go.jp/worldmap/kinki.html#hyogo

事務局ニュース

◎ PREXラオス同窓会の新設（2007年7月）

2007年7月、ラオスからの研修参加者による「PREXラオス同窓会」が設立された。メンバーは、企業経営者（「アセアン研修」参加）や、日本センター所長（「日本センター職員研修」参加）ら34名。7月には現地でフォローアップセミナーを開催する。また新たな研修事業検討のために、現地諸機関を訪問し、研修のニーズ調査も行う。

PREX同窓会は、シンガポール、マレーシア、インドネシア、フィリピン、タイ、ベトナム、モンゴル、中央アジア、中国、重慶、メキシコ、ミャンマー、ラオス合わせて13カ国・地域となった。



7・8月実施の主な研修

■ ウズベキスタン・カザフスタン日本センター ビジネスコース実務研修

◎期　間：6/28～7/10
◎対象者：ウズベキスタン日本センター ビジネスコース受講者 4名
　　カザフスタン日本センター ビジネスコース受講者 3名
◎委託元機関：独立行政法人 国際協力機構（JICA）

■ 兵庫県・広東省草の根技術協力事業「資源循環社会における環境改善」現地セミナー

◎期　間：7/1～7
◎対象者：広東省広州市で家電リサイクルや廃棄物処理を担当する部門の行政官等、約100名
◎関係機関：独立行政法人 国際協力機構（JICA）、兵庫県、広東省

■ 中国中小企業振興セミナー

◎期　間：7/11～8/7
◎対象者：中国西部地域の政府関係機関で中小企業の経営をサポートする職に従事しているマネージャークラス 10名
◎委託元機関：独立行政法人 国際協力機構（JICA）

C O L U M N

インターンシップを終えて

立命館大学　国際関係学部3回生　岩田知大さん

PREXは、2007年2月5日～3月23日まで、立命館大学岩田さんをインターンシップ生として受入れ、途上国の人材育成支援について具体的な活動を体験してもらいました。

「中米・アジア貿易振興コース」に同行する岩田さん（中央右）。

太平洋人材交流センターに初めて行ったその日に、私は職員の年齢層に男性と女性で偏りがあることに驚いた。また私の中にあった「社会人は社交辞令が好きだが薄情」という固定観念も打ち砕かれ、学生である私のことにとても興味を持って接していただいた。

インターンシップ先の特性は事前に知っていたが、いざ始めてみてからも、その活動内容の独自性にたびたび驚くことがあった。例えば一般企業でいう残業はほとんどないし、数少ない正規雇用女性職員は完全な私服で働いており、個性が見られる職場だった。また、男性職員は私が就職したくなるような有名企業からの出向で人生経験も含め豊かな経験をお持ちだった。そのような職場で、仕事の話をするにもそれ以外の話をするにも全てが私の貴重な経験になり、また将来の財産になったと確信している。

私はこのインターンシップで初めてアルバイト以外で社会に接したが、それに関しても様々な思いを抱いた。慣れないスーツで毎日1時間以上かけて通勤すること。関係先との密なつながりを非常に大切にすること。なにより、学生とは比べものにならない程責任が重くなること。私的なハプニングが多かった7週間だったが、社会人になることの難しさを改めて認識させられた研修であった。ありがとうございました。

PREXの研修実績

2007年5月末現在

PREXは、1990年4月設立以降、開発途上国の人材育成事業と、その活動を通しての国際的人材交流促進に努めています。

●研修累計（1990～）
333コース

●受講者累計（1990～）
110カ国・地域　10,237名
【受入（訪日）研修 3,161名／海外研修 7,076名】

●研修事業でお世話になった講師数（延べ）
2005年度 114名／2006年度 116名

●研修事業でお世話になった訪問先（企業/団体）数（延べ）
2005年度 330件／2006年度 355件

編集・発行　財団法人 太平洋人材交流センター
専務理事・事務局長　藤田 賢次
〒552-0021　大阪市港区築港2丁目8-24
pia NPO　5階 502号室
TEL 06-4395-2650
FAX 06-4395-2640
ホームページ: http://www.prex-hrd.or.jp
電子メールアドレス: prexmail@prex-hrd.or.jp